

# くりかえしドリルで学びを育てる

島根県松江市立中央小学校教諭 川上 宜久

## 1 先輩の言葉の重み

「子どもに魚を与えるよりも、釣り方を教えよ」と、先輩の先生によく言われた。「漢字テストや計算テストの得点を問題にする前に、その子の獲得のしかたを問うてみよう」という意味だろうが、この言葉はあたりまえのように聞こえて、実践はなかなか難しい。

漢字テストで80点をとった子に、100点になるまでの居残り学習を課す。これは私がいつもしていることなので、できれば否定されたくないが、「20点分の魚を与えただけのその場のぎだ」と先輩からはしかられそうだった。

居残り学習の時に、「この子は昨晩どのよな学習をして、漢字テストに向かったのだろう」と、子どもの学び方をさぐろうとする教師はそうはいないだろう。大切だとわかっていても、多忙感のためになかなかできないものである。

でも、居残り学習そのものについてもう一度じっくり考えてみると、100点にして家に帰すこと以上に、「明日は居残りしなくてもいいように、しっかり勉強してくるんだよ」という意味合いが大きいことに気付く。そう考えると、先輩の言葉がしっくりくる。

居残りで「よっしゃ100点！」と魚を与えただけで帰すのではなく、学び方についての具体的な声かけをして、子どもに釣り方を獲得させようという気になるのである。「自分の力で100点とれるようにね」という気持ちを込めて。

## 2 低学年のうちの学び方

### ○ 1回よりも2回、2回よりも5回

書いて覚えることを習慣化させたいが、書くこと自体が難しい子がいる。そんな子には、「書けるようになったね」「もう1回書いてみよう」「1ページ書けたのかあ。すごいぞ」というふうに、回数が増えるたびに、「いいぞ、いいぞ」と、自信が深まるような声かけをしていくことが大切となる。

一方で、ほとんど勉強しなくても平気で100点をとれる子もいる。読書量が豊富で、漢字練習をしなくてもいいような子である。外見的には全く問題がないように見えるが、低学年の頃のドリル経験が不足するようであれば、先々、問題となって現れることは明らかである。

このどちらの子どもに対しても、練習回数は多い方が望ましい。

低学年のうちには、宿題を課すときに回数を示すことが多い。たとえ正確に書ける字でも、「漢字ドリル8ページを10回ずつ書いてくる」というように、練習回数のノルマを課す。1回ずつ書いて「宿題、やってきました！」と言わせたくないため、ここには、家庭学習に一定時間以上向かわせたいという教師の願いが込められている。

このように、「1回よりも2回、2回よりも5回」の取り組みは、じっくりとねばり強い学習を獲得させるために大切である。しかも、数多くをこなすということは、スキルに

スピードを持たせることにも有効である。

だから、低学年のうちには、たとえ100点をとっていても、練習量がどれほど多いかという視点で、子どもの学びを見ていくように心がけたいと考える。

## 3 高学年の学び方

### ○ 5回よりも4回、4回よりも3回

「先生、今日の宿題は何回ずつ書けばいいんですか？」と質問されることがある。高学年ともなると、新出漢字の画数も多く、難しくなるので、能率的に学習を進めさせたい。練習回数もできる限り少なくすむに越したことはない。

私は、低学年と同様、満点をとった子にも、「どのくらい勉強した？」と問うている。しかしベクトルは正反対。時間や回数をたずね、認めや励ましの言葉がけによって、30分よりも20分、10回ずつよりも5回ずつという学びの獲得を期待している。能率的な取り組みによって生み出される、子どもの余力部分を多くしていきたいと願って。

### ○ 書けるようになるまで

私は宿題を「漢字ドリルの26ページ①～⑩（書けるようになるまで）」というように出している。ここでいう「書けるようになるまで」というのは、次の日の漢字テストで10点満点がとれるようにということの意味する。

日々の授業で使う教材や教具。隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？  
このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

能率的に宿題を進めることは大切だが、まずは正しく書けることが優先。テストの点数が悪かった子には、次はどれぐらい練習してテストに臨むかを考えさせたい。練習時間や練習回数を具体的に決めて約束し、それを積み上げることによって、自分の学習リズムを獲得させたいと考えている。

### ○ 間違った問題に印をつけ、

#### 次は印のついているところから勉強する

間違った問題をノートに書き溜めていく「間違いノート」の取り組みは、たいへんいい実践だと思う。しかし、これは点数がなかなか出ない子にとっては、量的にとっても辛い作業になってしまうので、私は取り組んでいない。私の学級では、「テストを返してもらったなら、ドリルの間違った問題に印をつけよう」とだけ約束している。たったこれだけのことだが、これがなかなか全員に定着しない。テストに直接間違い直しをして、早く満点をもらいたいという気持ちになるからなのだろうか。

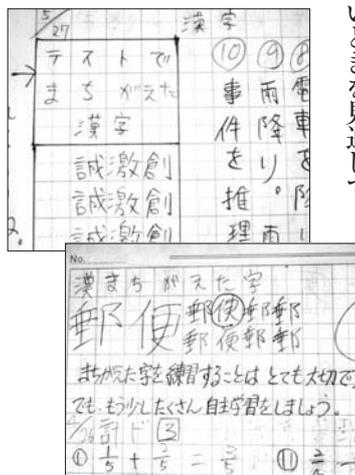
そこで私は、居残りの時に、漢字ドリルそのものを点検している。「今度練習するときには、印がついている問題からしようね」と一言かけながら。この印づけがしっかりと定着するまで、点検を続けている。

### ○ 1回目と2回目のテスト勉強の違い

学期の後半や学年末には、2回目・3回目のドリルテストをしている。1回目のテスト

勉強では、①から順に練習していくのが順当だろうが、2回目のテスト勉強では、1回目と同じようにはしてほしくない。弱点をいち早く補強しようとする学習の構えをつくるために、間違ったところを最初に点検し、その後で通して確認するといった取り組みを定着させたい。将来たくさん学習しなければいけないときを見通して。

### ▼ 2回目のテスト勉強例



### 4 宿題にちよびりトッピング

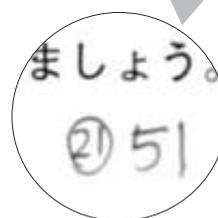
#### ○ 数値を変えた問題を自作する

これは余力のある子を意識した活動だが、「計算ドリルの宿題が終わったら、同じような計算問題をもう1問作って、ドリルに書き込んでおこう」と、子どもたちに言っている。自分で問題を作ること、問題の構造の理解を深め、数値を動かして考えることにつながる。期待しているからである。

時々、「友だちの問題を解こう」と、自作問題を解き合う時間をとるのだが、これがけっこうおもしろい。子どもたちは、わいわい言いながら解き合っている。

### ▼ 子どもの自作問題

問題27 次の数の約数を、みんなかきましょ	
① 3	⑤ 21
② 4	⑥ 23
③ 9	⑦ 27
④ 12	⑧ 29



子どもの感想から

○○さんの②(51)の約数をみんな書きましよう)をさせてもらいました。

奇数の問題をするのは苦手な方なだけ、3でわって見たら17が約数で見つかりました。17が約数になるのは初めてだったので、けっこうびっくりしました。ほくも今度、○○さんのようにもずかしい問題をつくってみたいです。

ドリル学習は受け身的にとらえられがちだが、こんなわずかなトッピングで、新たな発見も生まれ、主体的な子どもの動きとも出会えるので、そんな時はとてもうれしくなる。

### 5 先輩の言葉を胸に刻んで

小さな取り組みだけれど、ほんの少しの心がけ、言葉がけで、子どもの学びが変わっていく。そういう意味で、先輩の言葉は、子どもの将来を明るく照らしてくれている。つい点数に目を奪われがちな私だが、その前に考えないといけないことをしっかり意識して、これからも実践を積み上げたい。